

桑原保光「学校における望ましい動物飼育のあり方」

新しい動物飼育活動の考え方と飼育基準について



1

人と動物が幸せに暮らすために
SDGsな未来 心の満足度の向上を目指す

動物愛護法

- (基本原則)
- 第二条 動物が命あるものであることにかんがみ、何人も、動物をみだりに殺し、傷つけ、又は苦しめることのないようにするのみでなく、人と動物の共生に配慮しつつ、その習性を考慮して適正に取り扱うようにしなければならない。
- (普及啓発)
- 第三条 国及び地方公共団体は、動物の愛護と適正な飼養に關し、前条の趣旨にのっとり、相互に連携を図りつつ、学校、地域、家庭等における教育活動、広報活動等を通じて普及啓発を図るよう努めなければならない。

2

学校における望ましい動物飼育のあり方
文部科学省委嘱研究 平成12年発行 日本初等理科研究会

目次

- 第1章 子どもの成長・発達と動物飼育
 - 第1節 幼児と動物飼育
 - 第2節 児童と動物飼育
- 第2章 学校における望ましい動物飼育
 - 第1節 飼育動物にあたって
 - 第2節 心をくむ飼育活動
 - 第3節 飼育動物の例(ウサギ、モルモット、ハムスター、ニトリ・チャボ)
- 第3章 動物飼育の課題と対策
 - 第1節 飼育動物の疾病と対策
 - 第2節 学校における動物飼育の工夫
 - 第3節 動物飼育のためのネットワークづくり 第4節 動物飼育と関係法令
- 第4章 動物飼育の活動例
 - 第1節 幼児における動物飼育の活動例
 - 第2節 小学校低学年における動物飼育の活動例
 - 第3節 小学校中・高学年における動物飼育の活動例
 - 第4節 子どもの生活と動物飼育の例
- 作成委員
- 参考資料 小学校学習指導要領における動物関係の記述抜粋



3

動物飼育にあたって

- 学校における望ましい動物飼育を行うにあたっては、必要かつ十分な条件を整えることが大切である。また、条件整備を行うこと自体も動物飼育の大切な内容でもある。
- 動物飼育のねらいの実現には、まず学校で動物を飼育する意義や目的について、教科や特別活動等における位置づけや指導の基本との間で明確にし、飼育に対する考え方をしっかり持たなければならない。
- 次に、それを保護者や学校の近隣及び地域の人々に説明し、理解や支援を得るようにする。飼育活動にこれらの人々の意見を反映させることも考えられる。動物飼育にあたっては、何よりもこうした取り組みが必要である。そして、これを毎年確認し合い、常に新たな気持ちで飼育を続けることが大切である。
- 飼育の条件整備・年度当初に考え方の確認と統一

4

動物飼育の考え方

- 動物を飼育することは“動物とともに暮らす”ということである。動物は、教材としての「物」ではなく、子どもたちにとってのよき「生きた仲間」である。動物の世話をすることは“命を預かる”ことを意味する。世話をする者は、自分と同じように、動物の体の健康や心の安定を考えながら交流しなければならない。また、望ましい動物飼育をするにはゆとりが必要である。学校や地域の実態に合った動物を、適切な数だけ丁寧に未永く飼育するようにしたい。

5

(案)動物飼育の考え方

動物飼育は命を預かる教育活動として実施するもので、動物は、教材としての「物」ではなく、子どもたちにとってのよき「生きた仲間」である。動物の世話をすることは“命を預かる”ことを意味する。世話をする者は、自分と同じように、動物の体の健康や心の安定を考えながら交流しなければならない。また、望ましい動物飼育をするには経験とゆとりが必要で、少ない動物を身近において丁寧に最後まで飼うことが小学校における飼育の基本である。

小学校動物飼育の考え方の統一

☒「教材」「物」 → 「生きた仲間」「命を預かる」

↓

☺♀ 命を預かる教育活動として実施する

6

何を飼育するか？

- 適切な飼育のためには学校や地域の実態に即した動物を選ぶことが望ましい。学校の規模、施設、教職員等、自校の実態を考慮する。また、地域の気候や環境などにも配慮する必要がある。あまり特殊であったり、手間がかかりすぎる動物は飼わないことが望ましい。また、地域でよく飼われている動物は、学校で飼育するにあたっての支援者や協力者等も得られやすい。

↓

- 動物種 ・ハムスター ・モルモット ・ウサギ
 ・小鳥 ・チャボ ・鶏

動物種の選択 教員の飼育経験と知識等で決める

7

どのように飼育するか

- 飼育の実際を考えれば、動物の快適な生活環境の維持、掃除や管理のしやすさなどを考慮して、適切な空間を確保することも大切である。それによって動物同士の争い、ケガや病気も少なくなり、動物は安心して生活ができるようになるし、子どもたちもゆとりをもって飼育を楽しむことができる。また、動物の数は基本的に増やさないようにしたい、動物の子育てに出合わせたいときは、事前に飼育してくれる人を見つけてから繁殖させる必要がある。

↓

- 飼育の場所→うさぎは個別室内飼育を原則とする
- 飼育経費等→各学校の予算の中で経費として計上する
- 原則的に繁殖禁止

8

どんな動物をどのように飼育するか 教科目的に応じて動物種を選択し飼育する。

ハムスター 小鳥	モルモット チャボ	うさぎ 鶏
入門編	応用編	展開編
		

9

飼育舎はどこにつくるか

- 動物の飼育舎は、子どもたちが動物と絶えずかわり、親しみを感じられるような場所に設置することが望ましい。例えば子どもたちが出入りする昇降口の近くなどに設置し、絶えず子どもの目が行き届きやすく、短い休憩時間などにも立ち寄ることができ、動物の様子や行動が観察できるようにしておくことなどが考えられる。一方、動物の健康を考慮して、日光がまったく当たらない場所とか、冬になると冷たい強い北風が吹きつけるような場所は避ける。飼育舎に隣接して、動物のための運動場が作れるような広い場所が望ましい。動物の運動場があれば、子どもたちとの交流の場として利用できるし、掃除のときにも、動物を安心して出しておける。なお、住宅密集地での飼育舎の設置は、異臭や鳴き声などで周りの住民から問題視されることがないように十分に配慮する。

10

ウサギの飼育法と飼育舎の課題




日本獣医師会

11

令和3年施行の改正動物愛護法 飼養環境の管理基準が具体化されました。



温度計及び湿度計
備え付け

分離型運動スペース

12

桑原保光「学校における望ましい動物飼育のあり方」



13



14



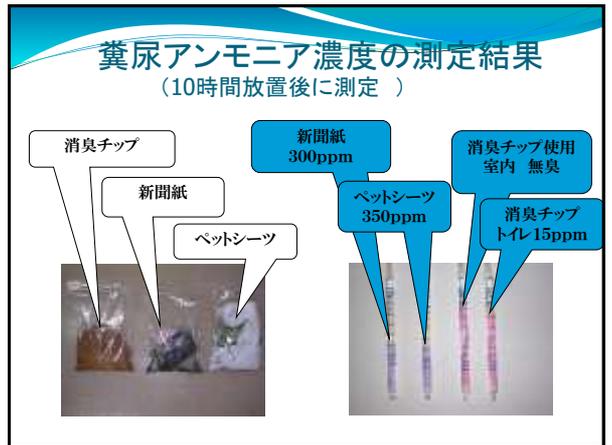
15



16



17



18

桑原保光「学校における望ましい動物飼育のあり方」

生活科 動物介在教育の指導例

- 生活科指導案（2年間の室内継続飼育）
- 『動物ふれあい教室』
- T・T方式（1時限－45分間）
- T1教員・T2獣医師
- 単元テーマ
- 指導目標作成
- 事前・事後指導（飼育栽培・図工等の連携）

19

大単元名「おおきくなあれ」 単元名「一生懸命世話をするよ」



20

事前学習例 ウサギの絵を描く



群馬県獣医師会

21

事後学習 粘土でウサギを作る



群馬県獣医師会

22

自尊心や養育心の育成が重要
マザーリング(子育て体験の模倣)



23

動物を可愛いと感じ、
放っておけない存在になる



24

興味、関心と生命の神秘性



25

心臓(心拍)の確認



26

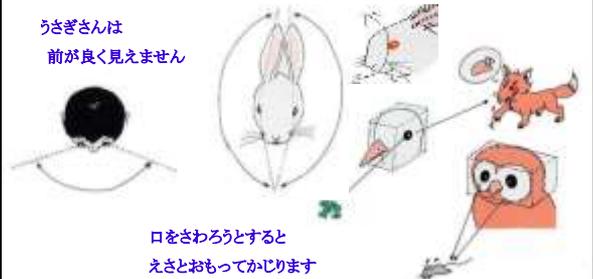
何を食べるかな 好物は何かな？



27

めの見えるはんい

うさぎさんは
前が良く見えません

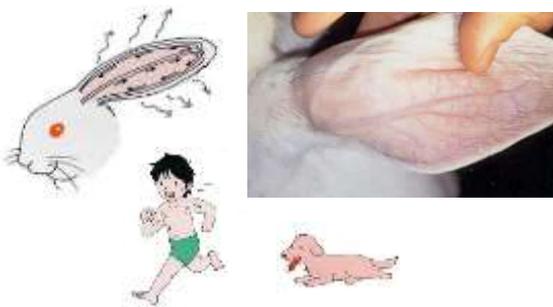


口をさわろうとすると
えさとおもっかじります

ウサギと猫の音階へ

28

耳のしくみ



29

足や指の違いは？



30



31



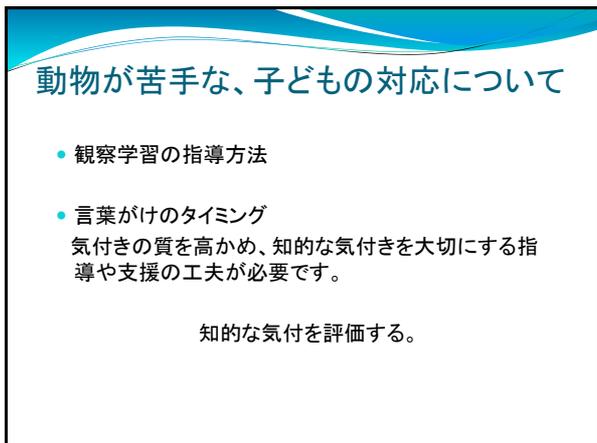
32



33



34



35



36



37

生活科体験教育の重要性

かわいいから抱いてみたいと思う

↓

抱き方等によって動物の様子が変わる

↓

ウサギを抱いて
ウサギが喜んでいるのか、嫌がっているか？

↓

相手の気持ちが理解できるようになる。

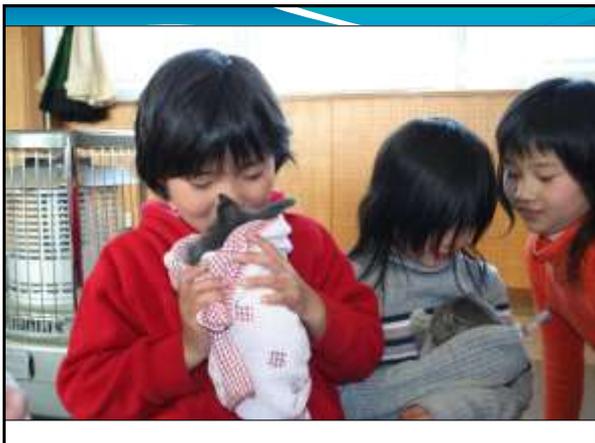
38



39



40



41

生活科命の教育 体験指導について

身近な動物との触れ合いを通して、動物も自分も生きていることを実感する。

生きることのすばらしさを知り、生命を大切にすること。

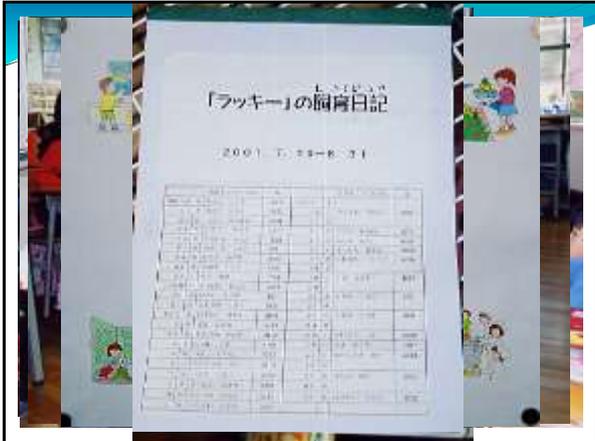
◆生活経験の中で生きていることを感じ取る。

- うさぎを抱っこできた
- 体にはぬくもりがある
- 心臓が規則正しく動いている
- 体の違いに気が付いて
- 毎日のお世話が大切

大人が正しく行動することを、子どもに見せる

42

桑原保光「学校における望ましい動物飼育のあり方」



43

休日の対応例

- 当番制で学校の動物を家庭に持ち帰る
学校飼育動物のホームステイ計画
- 飼育期間限定したレンタル飼育に方針転換

群馬県獣医師会

44

幼児と動物飼育

45

目的に応じた動物種を選択

46

動物介在教育の導入

47

楽しく遊びたい
可愛いだけでいいよネ

48

動物は可愛いだけ？



49

食育食農教育の必要性



50

動物介在教育の指導ポイント

- 1 飼育活動を通じて、学び育つ子どもの姿
- 2 飼い続けることによって学ぶもの
- 3 協力しあって共に世話をするなかで学ぶもの
- 4 感動を表現し活動を振り返ることにより学ぶもの
- 5 動物固有の性質や習性の中から学ぶもの
- 6 地域の人とのかかわりのなかで学ぶもの
- 7 幼児期の発達と心の教育の重要性
- 8 見方、考え方、感じ方を豊かにする動物とのかかわり方
- 9 命あるも動物をいつくしみの心情や思いやりの心を育む
- 10 動物を心配する子どもの心を大切にす飼育活動

51

動物介在教育の重要性を考える

- 1 何ができるようになるか (育成を目指す資質・能力)
- 2 何を学ぶか (飼育を学ぶ意義・知的な気付の向上)
- 3 どのように学ぶか (指導計画・指導の改善充実)
- 4 子どもの発達段階に応じて、どのように支援するか
(子どもの発達を踏まえた指導)
- 5 何が身についたか (体験活動の評価)
- 6 実施するために何が必要か
(飼育理念実現のための方策)

命の体験活動→感動→表現→展開→生きる力

52